いのち万華鏡

こころの花
いのちの華 編纂委員会 編

い

乃華鏡

装画
林静一
はやし・せいいち　一九四五年旧満州国営口生まれ。六七年雑誌「ガロ」に作品を発表。以後、アニメーションとイラストレーションの世界で幅広い活躍をしている。著書に『ジャパニーズウーマン』『恋文』（サンリオ）画集『源氏物語』（朝日新聞社）など。

ブックデザイン
渡辺千尋

いのち万華鏡

一九九〇年四月一六日第一版第一刷発行©

編集・発行
こころの花・いのちの華　編纂委員会
〒六〇七　京都市山科区四ノ宮小金塚町一-一六九
電話＝〇七五・五九三・〇一〇一

発売元
禅文化研究所
〒六〇四　京都市中京区西ノ京壺ノ内町八-一　花園大学内
電話＝〇七五・八一一・五一八九

印刷＝便利堂　製本＝新生製本
ISBN4-88182-079-6 C0095
落丁・乱丁のときはおとりかえいたします。

[こころの花・いのちの華　編纂委員会]
生命の大樹・いのちの塔実行委員会
京都幼児フォーラム
禅文化研究所
臨済宗連合各派布教師会

定価1500円
(本体1456円)

いのち万華鏡〜目次〜

第一章　いまを生きる

中山千夏　いのちの不思議　六
村松英子　子どもたちと共に　一二
増田れい子　たった一つの真理　二〇
吉田ルイ子　アパルトヘイトの子供たち　二六
曽根富美子　母について　三〇
佐伯聰子　親の視点　子の視点　三六
紺谷明子　南天　四一
山内五百子　「顔施」という言葉　四七

第二章　自然と生きる

丸木俊　人も木も生きている　五二
加藤幸子　モクのいのち　五六
石牟礼道子　草の声を　六二
岡部伊都子　花明かり・いのち明かり　六八
和泉雅子　すばらしい教え　七四
富山和子　自然と人間のかかわり　八〇

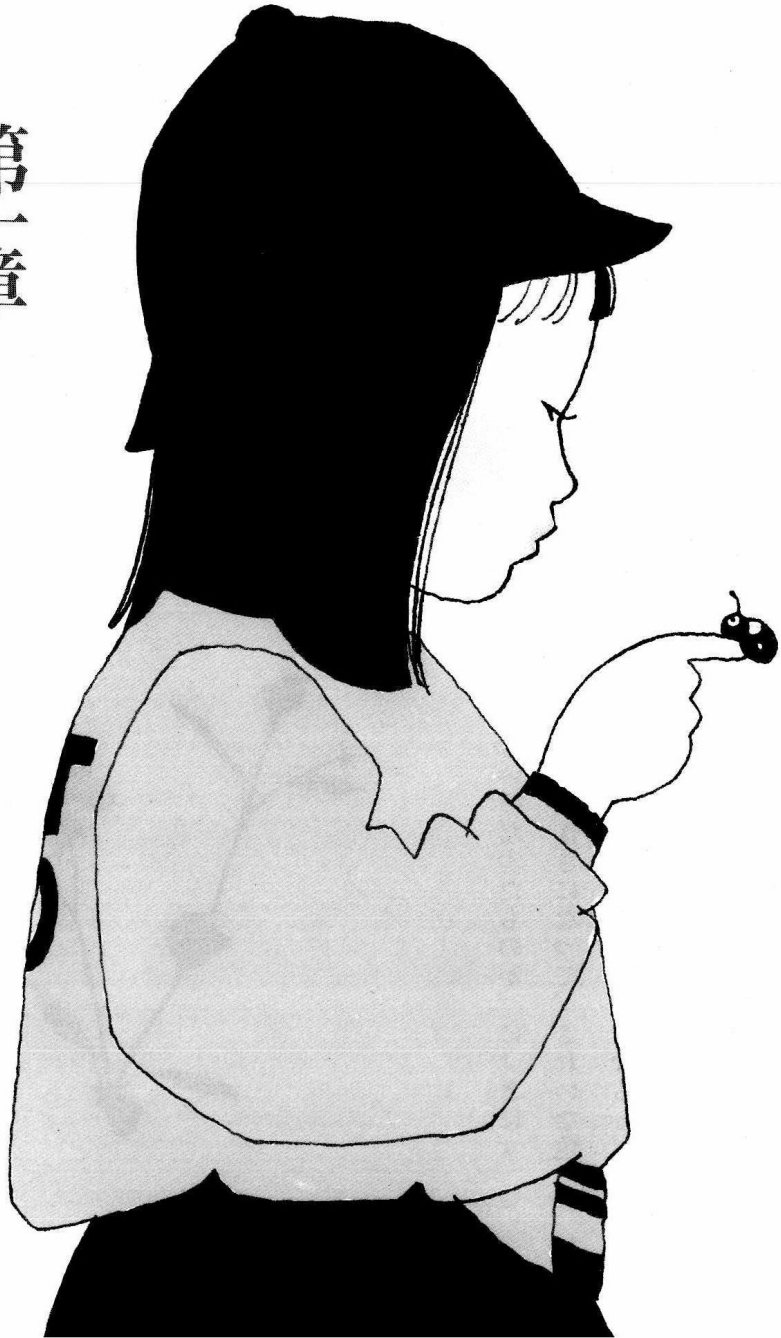
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

今井通子　自然界に学ぶ　八六
猿橋勝子　地球環境と人間　九一
大谷美和子　駅前の銀杏の木　九六
澤井紀俗子　チューリップの花に想う　一〇一

第三章　生と死

瀬戸内寂聴　いのちについて　一〇八
岡百合子　雉子鳩　一一四
手塚悦子　手塚治虫が愛した宇宙　一二〇
道浦母都子　明日死ぬ牛　一二六
山本義道　夏椿によせて　一三三
甲斐弘子　いのち万歳！　一三八
佐伯輝子　生きること　死ぬこと　一四二
矢島里美　いのちを使って生きる　一四八
こころをこめて　一五三

第一章 いまを生きる



いのちの不思議

中山千夏　作家

草や木ってほんとうに不思議だ。小さな黒っぽい種だったものが、にょきにょき伸びて緑色になって、もとの何千倍、何万倍もの大きさになって、きれいな色の花や実をつける。あるいは冬の間、枯れ木みたいだったのが、暖かくなると可愛らしい芽をたくさん吹き出し、夏には葉でいっぱいになる。

人間は昔からこうしたことを不思議だなあと思ってながめてきたらしい。日本の古い神様には、カムムスヒとかワクムスヒとか、ムスヒのつく名前を持つ神様がたくさんいる。学者の言うところでは、ヒはお日様のヒなのだそうだ。そしてムスは、いのちがむくむくと育つ力を表す言葉であるらしい。今でも、コケがた

くさん生えることをコケムスと言うけれど、そのムスと同じだそうだ。

昔の人にとって、沈んではまた登り、登ってはまた沈む太陽は、とても不思議なものだったろう。そして、稲やらほかの人間の役に立つ草木の成長を助けるらしい太陽の力もまた、ありがたく不思議なものだったろう。にょきにょきと大きくなる植物自身の力も、ありがたく不思議なものだったろう。それで神様にムスヒという名をつけたのだろう。

草や木を見て私が感じる気持と、昔の人が感じた気持とは、きっとかなり違っている。なにしろ私たちは学校でいろいろなことを習いすぎてしまった。太陽は物質に過ぎないこと、地球はまるいこと、引力の働きで地球が太陽のまわりをまわっていること、細胞は分裂して増え、小さな種が大きな植物になること、根が地中の養分を吸収し、葉が光合成をおこない、それで植物が成長しいのちを保つこと、などなど。なにもかも説明されつくして、不思議なことなんかなにもないみたいだ。

それでも、草や木を見ると不思議だなあ、とまず感じる。そして、その感じは間違っていない、と私は思う。太陽は物質に過ぎない、地球はまるくて太陽のまわりをまわっている、細胞は分裂する、根は地中の養分を吸収し葉は光合成をおこなう、よろしい、しかしなぜそうなってるの？　どうしてこういうことが始まったの？

よく考えてみると、昔の人が不思議だなあと思ったことの根本は、何も解決していないのだ。宇宙の果てがどうなっているものか、それどころか果てがあるのだか無いのだか、誰も知らない。この地球にいのちがどういうしだいで誕生したのか、誰も知らない。わけても、人間がどう誕生し進化したのかについて、疑問の余地のない完全な仮説はあらわれていない。よその星から生命体が、あるいは人間が飛んできて定着したのだ、という説は、あまりに突飛だからマジメな人には相手にされないけれど、それが事実でもおかしくないくらい、いのちや人間の誕生についてはまだまだ謎だらけだ。

今「まだまだ」謎だらけ、と思わず言ったが、それならいつか謎の解ける日がくるのだろうか？　私の見込みでは、こない。

私の考えでは、モノゴトの根本を解明するには、そのモノゴトを外側からながめる必要がある。この世界、この宇宙の根本を解明するには、この世界、この宇宙を外側からながめる必要がある。それが「あの世」なのか「四次元の世界」なのかは知らないが、ともかくそこに立ってみなければ、この世界、この宇宙の根本は解明できない。だから、この世界、この宇宙の内側で生きている人間には、たとえそれがどんなに偉い科学者であったとしても、この世界、この宇宙の根本は解明できないだろう。

そしてあらゆるいのちの成り立ちは、この世界、この宇宙の根本としっかり結

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

びついている。この世界、この宇宙の根本の解明が不可能だとすれば、いのちの成り立ちもずっと謎のままだろう。

だからといって私は科学を無用だと思っているわけではない。この世界、この宇宙の根本を解明することはできなくても、科学はこの世界、この宇宙のしくみを次々と明らかにしてきた。研究が進めば進むほど、人の考えがおよばないこの世界、この宇宙のしくみに驚かされる。その不思議に打たれる。この世界、この宇宙の不思議をさらにありありと見せてくれる、という点で、科学は尊いものだと思う。だが、それ以上のものではない。

地球にいのちがあること、草や木や動物、そして人間があることの意味は、人の智恵では思いもつかない。いや、意味などぜんぜん無いかもしれないし、とても大きな意味があるのかもしれない。どちらとも知れないことだから、慎重にあたらなければ、と私は思う。こんなムシ、たとえば蚊なんか無くていいのに、と刺されれば思うけれども、いや待てよ、なんか意味があるかもしれない、と思う。人でも同じだ。こんなヤツ、あるいは私なんか、生きたって仕方ない、と時に思うけれども、いや待てよ、なんか意味があるかもしれない、と思う。一見、何の役にもたたないようないのちでも、この世界、この宇宙の根本がわかってみれば、なるほどこんなところに存在意義があったのか、ということであるかもしれない。

思えば人間とはかわいそうなものだ。植物や動物は、存在意義があろうとなか

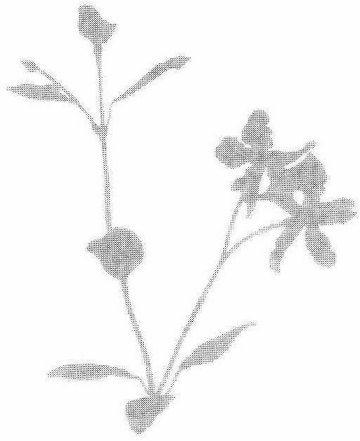
ろうと澄まして生きていられるが、人間はそうはいかない。自分は意味もなく生きている、なんの役にも立たない、と思いながら生きるのは辛い。それに、いのちについてたったひとつ確実なことは、いつか必ず死ぬ、ということだ。植物やほかの動物は、そのことを自然に受け入れて死んでいくけれど、人間は死ぬのがいやでジタバタしている。死ぬということは、いわばいのちの決まりなのに、どうも死にたくない。わがままを言って泣いている子供と同じで、おかしいけれどかわいそうだ。

人ごとみたいに言ったけれど、これは人間を外側から見ての話であって、私も同じ、かわいそうな人間だ。人はみんな、いろいろと違う条件に生まれつき、いろいろと違う人生を生きてゆく。しかし、生きている以上、なんとか生きている意味を見つけたい、と願い、死を恐れている点では、みんな平等だろう。言い代えれば、自分の存在意義があるのか無いのかわからない、そしてそんな状態のままいつか必ず死んでゆく、という点で、人間はみんな平等なのだ。

そう考えると、どんな憎らしいヤツに対しても、なんとなく親しみが湧いてくる。どこかあわれで何とか一緒にやっていこうではないか、という気がしてくる。同じかわいそうな人間同士が戦争で殺し合うなんてバカみたいだ。殺人者は憎らしい。だからといって死刑で殺してなんになる。殺されたいのちのほかにもうひとつ不思議ないのちを人間の手で消すだけの話ではないか——こうした考えはみ

んなみんな、草や木のムスヒの力が私に教えてくれたものだ。

なかやま・ちなつ　一九四八年熊本県生まれ。麹町女子学園卒業。子供の頃から子役で大活躍。六八年その活動の場を舞台からテレビへ。七〇年より著作を発表し始める。七七年市民政治運動を目指す団体「革新自由連合」の発足に参加。八〇年参議院選挙全国区に当選。八六年参議院選挙東京選挙区に次点で、落選。著作活動に専念するかたわら死刑廃止運動など市民運動を続け、現在に至る。著書に『からだノート』『偏見レポート』『子役の時間』（文藝春秋）『男たちよ！』『ダブルベッド』（話の特集）『鏡の国のアリス』（朝日新聞社）『現代日本女性の気分』（毎日新聞社）など多数。



子どもたちと共に

村松英子　女優・大学教授

「おねえちゃまはどう？　大丈夫？」

ドアをそっと閉めて入ってくると、七歳の息子は緊張した面持ちできいた。

「大丈夫よ。少し休めばよくなりますって先生がおっしゃったの。今眠ってるわ」

「そうか」

と、彼はこの診療所に入るとすぐ脱いだ帽子（お気に入りの船長帽）を手に、律儀に娘のベッドわきに立って、言った。

「僕も、ここに居て良い？」

看護婦姿のシスターは私が息子の言葉を伝えると「ウィ、ビアンスール（勿論）」

と、椅子をもう一つ持って来て下さった。

十二歳の娘が脳貧血で倒れて救急診療所に運びこまれた時のことである。

場所はフランスのルルド。ピレネー山脈の麓の小さな町で、山の向こう側はスペイン。ルルドは有名なカトリックの聖地で、今から百三十年程前に、ベルナデッタという信仰の篤い娘の前に聖母マリアがお顕(あらわ)れになり、生命の泉の湧き出る場所と、教会を建てる事とをお示しになった地である

この泉の水はいまも滾々(こんこん)と湧き出ていて沢山の蛇口からくめるし、持ち帰っても腐(くさ)らない。絶望と思われた病気がこの水で癒やされた例が数多く、医学的にも立証されている。まさに生命の水なのだ。

八月十五日は「聖母マリア被昇天の祝日」(マリア様が天国に昇られた祝日)で、この時期は聖母の聖地ルルドは一年中で一番混み合う。今度の私たちの旅は十五日のパリから始まったのでルルド滞在はその数日後だったが、小さな町は何万という訪問者で一杯だった。聖母の大聖堂と傍の生命の泉をめざして聖堂前広場は人で溢れる。目立つのが、何千という車椅子や担架の人たちを世話するヴォランティアの青年男女の姿である。世界中から集まった若者達がひたすら病人に奉仕する。その生き生きした姿を見ると、ルルドは聖地だな、と思う。聖地はまず人の心に奇蹟を起こすのだ。

小聖堂でのミサ後に娘が倒れた時、同行の人の知らせですぐに飛んできたヴォランティアの行動に改めて感動した。彼等は素早く、丁寧に娘を担架に乗せると、風のように広場を横切って救急診療所に運びこんでくれた。私と息子が走らなければ追いつけない程足早だった。途中ずっと娘に話しかけ、力づけてくれた。

――彼等は世界中から二月までに申し込み、審査を通った青年たちだそうである。

診療所では初老のヒゲをたくわえた温かいドクターと優しい看護のシスター達が迎えて下さった。丁寧に診察しながら、私に質問を浴びせたドクターは頷(うなず)いて「旅の疲れによる脳貧血ですね」といわれ、「でも三十分は絶対安静。眠りたかったら一時間半位は眠らせて上げて」といわれた。娘には「朝御飯を沢山食べたのだってね。偉いね。だからすぐよくなりますよ」と言って励ました。私が通訳すると、娘は青ざめた顔ながら嬉しそうに笑った。

「付き添いはお一人になさって下さい」と同行者は初めから診療室に入れて貰えず、待合室に追いやられていた。シスターに「私の下手なフランス語では医学的な会話が心配です」と訴えると「いえいえ、あなたのフランス語は大変お上手ですから大丈夫」と私まで励まされてしまっていたのである。

息子がそっと入ってきたのは、この時の事だった。いざとなると彼は私と娘に、小さな騎士(ナイト)ぶりを発揮する。シスターにいただいた椅子にかける前に「僕の椅子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com